



【脳科連連携法人一般会員のご挨拶文】 福島 弘明（（株）ケイファーマ代表取締役社長）

2016 年 11 月、株式会社ケイファーマは慶應義塾大学（慶應大）医学部発ベンチャーとして創設されました。創業者は、慶應大医学部教授の岡野栄之（生理学）、同教授の中村雅也（整形外科）、エーザイ出身の福島弘明の 3 人です。京都大学の山中伸弥教授が発明された iPS 細胞の最先端技術を活用し、神経難病等の疾患特異的 iPS 細胞を活用した創薬（iPS 創薬）事業と iPS 細胞から分化誘導した細胞を損傷部に移植し、機能回復につなげる再生医療事業の二刀流で事業を展開しています。本社は、港区六本木、研究所は、藤沢市の湘南 iPark「ケイファーマ・ラボ」と新宿区の慶應大信濃町キャンパス総合医科学研究棟に「ケイファーマ・慶應 脊髄再生ラボ」を設置しています。研究員のほとんどが米国の大学や国内研究機関、製薬会社等で創薬研究の経験を有する博士号取得者で、即戦力部隊です。製薬大手で研究開発のマネジメント経験者をサイエンティフィック・アドバイザーに迎え、産学の両視点から事業を推進しています。

iPS 創薬事業のリードパイプラインは、ロピニロール塩酸塩を用いた筋萎縮性側索硬化症（ALS）プロジェクトで、Ph1/2 治験において極めて有効な効果を確認しています。現在、国内開発の提携先であるアルフレッサファーマ社が Ph3 治験を準備中で、2020 年代後半の上市を目指しています。当社では海外開発パートナーとの提携を視野に治験の準備を進めています。iPS 創薬事業では、ALS、前頭側頭型認知症、ハンチントン病、那須ハコラ等、合計 6 プロジェクトに注力しています。再生医療事業のリードパイプラインは、亜急性期脊髄損傷プロジェクトで、先行して慶應大医師主導臨床研究（Ph1/2）が世界で初めて行われ、既に完了しました。こちらも極めて有効な結果が出ています。今後、当社で企業治験を進め、2030 年代初頭の上市を目指します。海外展開も視野に入れています。再生医療事業では、亜急性期脊髄損傷、慢性期脊髄損傷、慢性期脳梗塞等、合計 5 プロジェクトに注力しています。新規モダリティを獲得し、第3の事業を構築するため、米国 Boston/Cambridge に新ラボの設置を検討しています。

ケイファーマでは、特に、アンメット・メディカル・ニーズが高い脳神経分野の疾患等に注力し、一刻も早く有効な治療薬や再生医療等製品を創出し、世界中の患者様への提供を踏まえ、医療分野での社会貢献に貢献します。引き続き、脳科連の会員として活動に参画していければと考えています。脳科連の更なる展開を心から願っています。

【第 30 回リレーエッセイ】 日本アルコール・アディクション医学会理事長 神田 秀幸

日本ニューロリハビリテーション学会 理事長の才藤栄一先生よりバトンを受け取りました。日本アルコール・アディクション医学会（以下、本学会）の理事長を務めております、神田秀幸と申します。私は公衆衛生学を専門としており、アルコールやアディクションの問題について、本学会を通じて医学・医療と社会をつなぐ架け橋となるべく活動を続けております。脳科学関連学会連合（以下、脳科連）を構成する学会の中では、やや異色の専門分野出身の理事長と感じられるかもしれません。

本学会は、アルコール依存症だけでなく、薬物依存、ギャンブル障害、行動嗜癖などを含むアディクション医学全般を扱っています。これらの問題を単なる医療課題としてではなく、社会的・構造的な課題としても捉えている点に大きな特徴があります。そのため、本学会では学際的なアプローチを重視し、複数の学問領域を横断しながら、教育・研究・政策提言などを実践的に展開しています。

アディクション医学は、社会との関わりが極めて強い分野です。たとえば、近年では国内の航空会社において、パイロットの飲酒問題が繰り返し報道されています。2024年12月には国土交通省から業務改善勧告が出され、該当企業では滞在先での飲酒禁止や、飲酒傾向に基づく要注意者リストの作成といった対策が講じられました。しかしながら、2025年8月下旬、ハワイ滞在中の機長が乗務前日に飲酒したことで、国際線を含む3便に最大18時間半の遅延が発生し、大きな社会問題となりました。このような事例は航空業界に限らず、鉄道会社や運送業など交通・運輸関連業界全体に広がりうるリスクであり、業務への影響のみならず、社会安全や人命にも関わる重要課題です。パイロットや運転士などの健康管理において、アルコール問題をより強く意識する必要があると言えるでしょう。また、アルコールに限らず、加熱

式タバコの普及、市販薬のオーバードーズの増加、ゲーム障害と子どもの身体的発達との関係など、現代社会と健康の関連性はますます深まっています。

本学会は、2016年に日本アルコール・薬物医学会と日本依存神経精神科学会が統合して発足しました。そのルーツは1966年に創設された日本アルコール医学会にまで遡り、日本アルコール・薬物医学会としての活動を経て今日に至ります。一方で、1989年に創設された日本アルコール精神医学会および1998年設立のニコチン・薬物依存研究フォーラムが合併し、2012年から2016年にかけて日本依存神経精神科学会として活動していた歴史もあります。これら複数の学術団体の統合により、2016年に日本アルコール・アディクション医学会として新たなスタートを切りました。

本学会の最大の特長は、精神医学、内科学、総合診療学、薬理学、法医学、衛生学・公衆衛生学、心理学、看護学など、非常に多岐にわたる領域の研究者・保健医療従事者が集う、学際的な学術団体であることです。こうした多様な専門性を持つ会員の協働により、多様化するアディクション問題に対応し、学術的な研究と社会貢献を両輪とする活動を行っています。具体的な取り組みの近年の一例として、薬物依存症患者におけるC型肝炎の治療につなげるための調査研究があります。これは、本学会内の精神科と肝臓内科の専門家の連携から生まれたもので、現在では日本肝臓学会の参画も得て、C型肝炎のない社会の実現を目指す大きなムーブメントへと発展しています。このように本学会では、アディクションという複雑で混沌とした課題に対し、多角的な視点をもって新たな解決策を見出す取り組みを進めています。

また、学会活動の一環として、教育コンテンツや表彰制度も充実しています。異なる分野の専門家の方々にもご活用いただけるよう、アディクション医学の基本的な考え方から最新トピックまでを、短時間で理解できる動画教材として教育コンテンツを学会員向けに公開しています。さらに、学会最高賞である柳田知司賞をはじめ、学術奨励賞、優秀論文賞、優秀演題賞など、多様な表彰制度を設けており、会員のキャリアステージに応じた目標づくりと研鑽を後押ししています。

本学会は脳科連の構成学会として、他学会の皆様のご理解・ご協力のもと、活動を展開して参りました。今後も、脳科連の一員として微力ながら尽力して参ります。アディクションという複雑な社会課題に立ち向かうためには、他学会との連携と協働が不可欠です。今後とも、本学会へのご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

今回のリレーエッセイは日本臨床精神神経薬理学会の古郡 規雄先生にバトンタッチされます。

【デジタルブレインワークショップのご報告】

福井大学 工学系部門 工学領域知能システム工学講座 准教授 中江 健

福井大学の中江健です。2025年10月17日(金)~19日(日)、大分にある九州大学の運営施設の九重共同研修所・山の家にて「第2回 Digital Brain Workshop」を開催しました。本年は日韓合同で実施し、韓国からのオーガナイザー、招待講演者、学生の参加が大幅に増加しました。特に Dr. Se-Bum Paik (KAIST) が Korean Society for Computational Neuroscience 会長としてオーガナイズに参画し、日韓双方の若手・シニアをつなぐ実務的な橋渡し役を担っていただきました。

開催地が九重という遠隔地にもかかわらず、学部~博士課程、ポスドクまで計31名もの参加がありました。日本在住の外国人に加え、韓国勢の比率が高く、英語を共通語に理論・実験という枠にとらわれない多様なバックグラウンドのメンバーが一堂に介する会になりました。参加者は5-6名×6チームに分かれ、「デジタル脳」を総合テーマに理論・計測・AI・データ共有を横断する提案づくりを短期集中で行っていただきました。自然環境に身を置いた合宿形式を活かし、講師からの話題提供をベースにして、ポスターや懇親会での議論を含めて、共同研究提案を集中的に行っていただきました。

口頭セッションは OIST・銅谷賢治先生の Brain/MINDS 2.0 紹介で開幕し、次いで Staci Jakyong Kim 先生に老化脳の睡眠制御機構、東大・山田先生に神経ネットワークに対する教師なし学習の理論、東大・船水先生に意思決定理解のための AI 活用、生理研・兼子先生にメンタライジングの新しいモデル、理研 CBS・渡我部先生にマーマセットのメゾスコピック結合マッピング、KAIST・Dae Wook Kim 先生にポロジカルな時系列モデル解析を発表していただきました。かなり多様な発表内容でしたが、途中質問で講演時間が大幅に過ぎてしまうなど、学生の積極性が目立つ形となりました。夜は連日ポスターセッションと懇親会を設け、理論構築やデータ共有・解析パイプラインまで踏み込む実務的議論が活発化しました。チーム内で LINE 交換などもしていたことから、この Workshop で知り合ったメンバー同士で将来の国境・分野横断のコラボの芽となると期待しています。

最終日は英語で12分+Q&Aの発表を6チームの学生が実施し、脳高次機能のAI解析、音楽×脳科学、MRIの大規模解析など国際共同研究へ直結しうる提案が相次ぎました。各チームにはオーガナイザーや講師がメンターとして伴走することで、学生の自由発想と具体的な問題設定への着地がうまく行われたと思います。この学生発表も非常に質問が多く出たため、司会として時間管理が大変であったことは良い記憶として残っています。

本ワークショップを企画運営いただいた日韓のオーガナイザーの皆様、招待講演者・学生メンター・参加者各位、会場運営に尽力くださった関係者、そして継続的にご支援いただいている日本脳科学関連学会連合に、心より御礼申し上げます。来年度も継続的にデジタル脳に関係する企画を行っていきたいと考えておりますので、その際は何卒よろしくお願い申し上げます。

【第10回(2026)ジョセフ・アルトマン記念発達神経科学賞の募集開始のお知らせ】

日本神経科学学会では第10回(2026年)ジョセフ・アルトマン記念発達神経科学賞の募集を11月1日より開始いたしました。

募集詳細は下記Webページをご参照ください。

<https://www.jnss.org/joseph-altman-award>



【一般社団法人 応用脳科学コンソーシアム 2025 アニュアルシンポジウムのお知らせ】

開催日時:2025年12月3日(水)13:00~17:30(懇親会(希望者のみ、参加費要)17:30~19:30)

開催場所:JA 共済ビル カンファレンスホール(千代田区平河町)&オンライン

参加費:無料

申込はこちらから→



申込:<https://forms.office.com/r/jQuBNRZuDx>

申込締切:会場参加申込は締切っておりますが、オンライン参加の申込締切は2025年12月1日(月)24:00となっております。

【第41回国際生物学賞記念シンポジウム・講演会「神経生物学におけるブレイクスルー」のお知らせ】

開催日時:2025年12月20日(土) 研究者向け(英語)

2025年12月21日(日) 受講者講演(英語:日本語同時通訳)

場所:東京大学伊藤国際学術研究センター 地下2階伊藤謝恩ホール

参加費:無料(事前登録必要)<https://cbt-neurobiology.com/>

■主催:国立大学法人東京大学・独立行政法人日本学術振興会

申込はこちらから→



■後援:AMED ムーンショット

【活動報告(10月~11月)】

・第2回 デジタルブレインワークショップ(10月17日~19日)

【事務局だより(主に会員学会事務局向け)】

・脳科学オリンピックの寄付金募集期間は2025年10月7日~2025年12月5日となります。

ご協力をお願いいたします。

・評議員の変更がございましたら、事務局までご連絡をお願いいたします。

・メールマガジン内容へのご意見やお問い合わせは、貴学会の事務局経由でお願いします。